厚生労働科学研究費補助金

政策科学推進研究事業

若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究

平成17年度　総括研究報告書

主任研究者　　佐藤博樹

平成18（2006）年3月

若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究

平成17年度総括研究報告書

目　次

I. 総括研究報告 …… 1

II. 分担研究報告 …… 7

第1章　高卒者の追跡調査の設計と特色 ……佐藤博樹・石田浩……16

第2章　高校3年生の着地不安とその背景 ……佐藤香・玄田有史……26

第3章　進路意識の変化とその規定要因 ……元治恵子……40

第4章　高卒者と保護者が共有する価値観 ……深堀聰子……50

第5章　「卒業後」への連続性 ……鶴田典子……66

第6章　進路指導の評価に関する規定要因 ……長尾由希子……81

第7章　90 年代以降の高校多様化政策と進路選択 ……中澤渉……89

第8章　中等後教育進学に対する所得の効果 ……朴澤泰男……103

第9章　進学費用の調達方法を決定する要因 ……篠崎武久……117

第 10 章　一人親家族と大学進学 ……平沢和司……126

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 ……134

IV. 研究成果の刊行物・別刷 ……135

付録

1　高校卒業後の生活と意識に関するアンケート（第2次追跡調査）〈調査票 A〉
2　高校卒業後の生活と意識に関するアンケート（第2次追跡調査）〈調査票 B〉
3　高校卒業後の生活と意識に関するアンケート（第2次追跡調査）〈調査票 C〉
4　高校卒業後の生活と意識に関するアンケート（第2次追跡調査）〈調査票 D〉
5　高校卒業後の生活と意識に関するアンケート　基礎集計表

別冊資料

1　高校卒業後の生活と意識に関するアンケート（第1次追跡調査）　コードブック　2005 年
2　本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』NTT 出版　2005 年
3　石田浩編『高校生の進路選択と意識変容』東京大学社会科学研究所　2006 年

参加研究者名簿

主任研究者：佐藤博樹（東京大学社会科学研究所教授）
分担研究者：石田　浩（東京大学社会科学研究所教授）
玄田有史（東京大学社会科学研究所助教授）
佐藤　香（東京大学社会科学研究所助教授）
研究協力者：元治恵子（東京大学社会科学研究所リサーチレジデント）
篠崎武久（早稲田大学理工学部専任講師）
高橋康二（東京大学大学院）
鶴田典子（元 UFJ 総合研究所研究員）
長尾由希子（東京大学大学院）
平沢和司（北海道大学大学院文学研究科助教授）
深堀聰子（京都女子大学短期大学部専任講師）
朴澤泰男（日本学術振興会特別研究員）
本田由紀（東京大学大学院情報学環助教授）

I.　総括研究報告書

厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業
「若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証的研究」
総括研究報告書

主任研究者　佐藤博樹　東京大学社会科学研究所

研究要旨

本研究では、少子高齢社会の到来の中で現役世代を担う若年層の進路行動・意識・価値観の実態を把握するともに、彼らの行動や意識の変化について研究する。データとしては、高校 3 年生を対象とした「高校生の生活と進路に関するアンケート調査」（高校生調査）、学校への「高校生の進路指導に関するアンケート調査」（高校調査）、高校卒業後の１年目の追跡調査（第１回追跡調査）、さらに高卒者の保護者を対象とした調査（保護者調査）の４つの調査を用い分析を行った。本年度の研究から得られた知見は以下の通りである。

第１に、高校３年生が実社会へと巣立っていくときに抱く不安感や不本意に感じる心性を「着地不安」と捉え、その背景を分析した。着地不安は、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と深く結びついている。良好な友人関係、教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが明らかになった。

第２に、働くことや将来の進路・目標（進路意識）が高校３年生の時点と卒業後１年目にどのように変化したのかを分析すると、卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。男女の間では違いは見られないが、就職している者でその傾向は顕著であり、進学した者でも、大学へ進学した者の方が進路意識は不明確化していた。他方、短大へ進学した者では、意識が明確化している傾向が見られた。「家族とのコミュニケーション」は、進路意識を明確にする傾向があるが、「現在志向」は不明確化する傾向があることが明らかになった。

第３に、高卒後の進路選択の規定要因を分析すると、無業者や非正規雇用者は男性に多く、私学の出身者は就職もしくは専門学校進学をしなければ、無業・非正規雇用になる確率が上昇する。普通科の進学者は、就職の可能性は低くなるが、その代わり、進学か無業者になる確率が上昇する。大学進学率の高い高校ほど、就職や専門学校進学者より無業になる確率が高い。なお、職業科・専門学科の卒業生からは、無業者や非正規雇用者が特に出にくいことも明らかになった。出身家庭の所得の効果についてみると、男子の場合、出身県や出身学科、高校時代の成績を考慮すると、大学進学か否かに有意な効果を持たない。女子の場合は所得が高いほど、大学または高等教育に進学する見込みが高い。また、母子家庭出身者は、大学進学者の比率が低く就職者の比率が高いことが明らかになった。

分担研究者
石田　浩　　東京大学社会科学研究所教授
玄田有史　　東京大学社会科学研究所助教授
佐藤　香　　東京大学社会科学研究所助教授

A　研究目的

本研究の目的は、少子高齢社会の到来の中で現役世代を担う若年層の進路行動・意識・価値観の実態を把握するともに、彼らの行動や意識の変化についてパネル調査を実施して明らかにすることにある。具体的には、若年者の(1)学校在学中の生活と意識、(2)学校から職場への移行のパターン、(3)就業行動（非正規雇用、転職など）、(4)意識・価値観の変化、の４つのテーマについて研究する。

B　研究方法

高校 3 年生を対象とした「高校生の生活と進路に関するアンケート調査」（高校生調査）、学校への「高校生の進路指導に関するアンケート調査」（高校調査）、高校卒業後の１年目の追跡調査（第１回追跡調査）、さらに高卒者の保護者を対象とした調査（保護者調査）の４つの調査の分析を行った。

平成 17 年度は、第 2 回追跡調査も実施した。

（倫理面への配慮）

マイクロデータの使用の際には、個人情報保護に留意し、流出のないように細心の注意を払う。

C　研究結果と考察

今年度は、独自に実施した「高校生の生活と進路に関するアンケート調査」（高校生調査）、「高校生の進路指導に関するアンケート調査」（高校調査）、第 1 回追跡調査、保護者調査の４つを分析するとともに、高校卒業後の２年目の第 2 回追跡調査を実施した。研究会での議論を踏まえて、研究成果を以下の 10 論文にまとめた。

「高卒者の追跡調査の設計と特色」（佐藤博樹・石田論文）は、本研究の実施する追跡（パネル）調査の特色を明らかにした。第 1 に、高校生を在学中に調査した後、卒業後も継続して 3 年間にわたり追跡することにより、個人の行動と意識の変化をライフコースの中で総合的に把握することができる。第２に、教育（教育社会学）、就業（労働経済学）、家族（人口・家族社会学）、格差・不平等（社会学）、意識（社会意識と心理）など異なる専門分野からのアプローチを用いて調査を設計・実施し、データを分析していくことができる。第３に、すでに海外で実施されているパネル調査の蓄積を生かし、国際比較が可能な形で調査を設計し、分析しようとすることにある。このような作業を積み重ねることで、より厳密な国際比較が可能となり、日本の高校生の特質をより鮮明に明らかにすることができる。

「高校３年生の着地不安とその背景」（佐藤香・玄田）は、高校３年生が実社会へと巣立っていくときに抱く心性を「着地不安」と捉え、その背景を分析した。「どんな仕事をしたいのかよくわからない」「自分の進路について今でも悩んでいる」「社会でうまくやっていけるか不安だ」などの項目から着地不安スコアを定義すると、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と着地不安は深く結びついている。着地不安と人間関係との関連をみると、友人から悩み事を打ち明けられるタイプであることや、高校生活との関連では、授業内容が面白いと思っていると着地不安が低くなる傾向がみられた。さらに親や教師などの大人からの期待は、間接的に着地不安に影響を与える可能性がある。特に教師によ

る期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが可能となる。以上の考察を通じ、友人や教師との信頼関係をベースとする充実した学校生活を、すべての高校生に実現する教育や教師の重要性が示唆される。

「進路意識の変化とその規定要因」（元治）は、働くことや将来の進路・目標（進路意識）が高校３年生の時点と卒業後１年目にどのように変化したのか、また変化の背景にはどのような要因があるのかを分析した。高校３年時と卒業１年後を比較すると、卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。男女の間では違いは見られないが、就職している者でその傾向は顕著であり、進学した者でも、大学へ進学した者の方が進路意識は不明確化していた。他方、短大へ進学した者では、意識が明確化している傾向が見られた。重回帰分析によれば、「短大に在学していること」や「家族とのコミュニケーション」は、進路意識の明確にする傾向があるが、「現在志向」は不明確化する傾向があることが明らかになった。

「高卒者と保護者が共有する価値観－親友と好きなことを楽しむ時間・人の役に立つこと」（深堀）は、高校３年生の時点で明らかになった仕事での成功をあまり重視せず、親友と好きなことを楽しむ時間をもつことや、人の役に立つことなどを重視する価値観は、高校卒業後どのように変容したのかを分析する。高校生調査、第１次追跡調査、保護者調査、アメリカのNELS第３次追跡調査データの比較より、高卒者が高校３年時の価値観を基本的に維持しており、保護者とも価値観の多くを共有していることを明らかにした。一方、高卒者の価値観には、見過ごせない変化も生じている。就職者の間では、仕事で成功することや人の役に立つことを重視する傾向が弱まっている。進学者の間では、よい教育を受けることを重視する傾向が強まっているが、親友と好きなことを楽しむことを重視する傾向は弱まっている。価値観の規定要因の分析からは、人の役に立つことを重視する価値観の形成に最も強い規定力をもつのは、所得や進路ではなく、保護者の価値観であることが明らかになった。

「卒業後への連続性－高校生調査の時点から既に進路が変わった人たち」（鶴田）は、高校３年時点と卒業後１年目の間の（希望）進路の連続性を分析した。おおよそ１割の卒業生の間で、高校生時代の（希望）進路になんらかの変更があり、残りの約９割は進路が一貫していた。卒業前後の（希望）進路の連続性の規定要因を探ると、性別や出身高校といった属性的要因ではなく、本人のパーソナリティといった内面的な要因が影響を与えており、しかもそれは卒業後さらにナイーブな面を強くしていることが明らかになった。進路変更を経験した人々から浮かび上がってきたのは、「自分に自信がなく、かつ自分の考えをうまく伝えることができないナイーブで不器用な人物」像である。そういった心理的な面を考慮した若年者の就業支援の継続が今後も必要だと思われる。

「進路指導の評価に関する規定要因」（長尾）は、高校卒業後に高校時代の進路指導を振り返りどのような評価を卒業生が下しているかを考察した。男女共に７割前後が、高校時代の進路指導に満足していると回答している。満足度に影響を与える要因として、１）自分自身の進路選択に満足している場合は、高校の進路指導に対しても満足感を抱きやすくなること、２）高校が職業や先輩の進路状況についてよく教えてくれる、指導が熱心であるなどの場合は、満足感を抱きやすくなること、３）合格が困難なところは受験させないような雰囲気があった場合は、満足感を抱きにくくなること、などが明らかになった。一方で、現在の進路状況（四大・短大・専門学校・就職など）は、有意な影響を及ぼさなかった。結果としての進路に関係なく、本人の希望を尊重しながらの指導が重要であることが改めて示された。

「90年代以降の高校多様化政策と進路選択－就職・進学決定行動と学科との関係」（中澤）は、1990年代以降の高校多様化政策以降、どのような高校を卒業することが就職や進学の機会を高め、また一方で、非正規雇用となるリスクを高める結果になるのかを明らかにした。卒業後1年目の進路（①就職者、②無業者・非正規雇用者、③大学・短大進学者、④専門学校進学者）の分化を規定する教育・学校の効果を検証した。その結果、無業者や非正規雇用者は男性に多く、私学の出身者は就職もしくは専門学校進学をしなければ、無業・非正規雇用になる確率が上昇する。普通科の進学者は、就職の可能性は低くなるが、その代わり、進学か無業者になる確率が上昇する。大学進学率の高い高校ほど、就職や専門学校進学者より無業になる確率が高い。ただし、普通科の新しい高校ほど、無業者が多く出る、という傾向は、このデータからは見出せなかった。なお、職業科・専門学科の卒業生からは、無業者や非正規雇用者が特に出にくいことも明らかになった。

「中等後教育進学に対する所得の効果」（朴澤）は、高校生の大学・短大・専門学校への進学に対する出身家庭の所得の効果を分析した。高校生調査・第1次追跡調査・保護者調査のデータを男女別に分析した結果、以下の点が明らかになった。第一に、大学（また、短大を含めた高等教育）進学／非進学の二項選択については、男子の場合、出身県や出身学科、高校時代の成績を考慮すると、所得が有意な効果を持たない。専門学校をも含めた中等後教育への進学についてのみ正の効果を持つ。第二に、女子の場合は所得が高いほど、大学または高等教育に進学する見込みが高い。第三に、中等後教育への進学者のみに限り、学校種の選択に対する所得の効果を分析すると、男子の場合、大学／短大・専門学校の二項選択には有意な効果がないのに対し、女子の場合は正の効果が見られる。また、女子の大学／短大／専門学校間の多項選択については、専門学校に対する大学進学に所得が正の関連を持つことが明らかとなる。

「進学費用の調達方法を決定する要因」（篠崎）は、学費の高低や家計状況が進学費用の調達方法にどのような影響を与えるかを検証した。進学費用の調達方法には、1）貯蓄(自己資金)のみ、2）借入のみ、3）貯蓄と借入の組み合わせの3種類が考えられるが、どの調達方法を選択するかは家計の経済状況に大きく左右される。計量分析の結果からは、1）家計収入が高いほど貯蓄のみを選択する確率が高いこと、同時に、家計収入が低い世帯は借入のみをより選択しやすいこと、2）進学者が1人暮らしである場合、学費が高い場合は、貯蓄と借入の組み合わせを選択する確率が高く、資金制約下にある家計が調達方法の多様化を図っていることが明らかになった。

「1人親家族と大学進学－2004年高校生調査の母子家族を中心に」（平沢）は、1人親家族のなかでも母子（つまり父親がいない）家族の進学行動を分析した。母子家庭出身者は、そうでない者にくらべて男女とも、①大学進学（予定）者の比率が低く就職（予定者）の比率が高いこと、②その傾向は経済的な理由による直接的な関連と、学校類型（普通科進学校、普通科一般校、職業・総合校）を媒介とした間接的な関連に分けられること、ただし③その様態はやや複雑で、性別によって、また注目する2変数によって関連の有無に異なる傾向がみられること、が示された。教育機会の不平等を考察する際に、今後は一人親家族をも視野に入れたより包括的な分析が望まれる。

D　考察

論文の考察を簡潔にまとめると次のようになる。

・高校３年生が実社会へと巣立っていくときに抱く不安感や不本意に感じる心性を「着地不安」と捉え、その背景を分析した。着地不安は、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と深く結びついている。良好な友人関係、教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが明らかになった。

・働くことや将来の進路・目標（進路意識）が高校３年生の時点と卒業後１年目にどのように変化したのかを分析すると、卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。男女の間では違いは見られないが、就職している者でその傾向は顕著であり、進学した者でも、大学へ進学した者の方が進路意識は不明確化していた。他方、短大へ進学した者では、意識が明確化している傾向が見られた。「家族とのコミュニケーション」は、進路意識を明確にする傾向があるが、「現在志向」は不明確化する傾向があることが明らかになった。

・高卒後の進路選択の規定要因を分析すると、無業者や非正規雇用者は男性に多く、私学の出身者は就職もしくは専門学校進学をしなければ、無業・非正規雇用になる確率が上昇する。普通科の進学者は、就職の可能性は低くなるが、その代わり、進学か無業者になる確率が上昇する。大学進学率の高い高校ほど、就職や専門学校進学者より無業になる確率が高い。なお、職業科・専門学科の卒業生からは、無業者や非正規雇用者が特に出にくいことも明らかになった。出身家庭の所得の効果についてみると、男子の場合、出身県や出身学科、高校時代の成績を考慮すると、大学進学か否かに有意な効果を持たない。女子の場合は所得が高いほど、大学または高等教育に進学する見込みが高い。また、母子家庭出身者は、大学進学者の比率が低く就職者の比率が高いことが明らかになった。

E　結論

現代の高校生を取り巻く環境は大きく変化している。少子化による 18 歳人口の減少、進学率の上昇、卒業後無業者の増加、就職市場の縮小、といったマクロは変動の中で、高校生の生活と意識はどのように変化しているのであろうか。報告書に収録された論文の知見をまとめると次のようになる。

現代の社会においては、青少年は豊かさのなかで育てられ、現在が楽しいというのは当然の前提となっている。その現在からみれば、将来は不透明であるだけでなく、働かなくてはならないというだけでもネガティブにみえるのではないだろうか。こうした状況下では、着地不安を抱くことは、多くの高校生にとってむしろ当たり前の現実である。若者が社会に出ることを促すためには、きちんと就職しなければ将来大変なことになるという危機感を与えるだけでは不十分である。若い時期に乗り越えるべき困難を与え、期待を伴う視線と行動によって「自己無能感」を募らせないようにすること、将来に対してポジティブなイメージを持つことができるようにすることが、将来の着地不安を軽減することにつながる。

働くことや将来の進路・目標といった進路意識の変遷に着目すると、高校３年生の時点に比べ卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。高校を卒業後それぞれの進路に進み１年経ち、新しい生活環境にも適応し、将来のことを考える余裕もでき、自分のやりたい仕事を早くしぼらなければならないと感じはじめているが、どんな仕事をしたいか、10 年後にどのようになっていたいかが明確でなく、結果として、自分の進路について悩んでいるという、迷える若者像が浮かび上がってくる。しかし、自分の進路についてあれこれ悩むことは一

概には悪いとは言えない。悩むことを通じて職業意識が形成されることにより、学校から仕事への移行がスムーズに行われる場合もある。しかし、進路意識が不明確なままであれば、進路意識の明確化→進路活動→進路決定という流れにはのれず、進路未決定という状況に陥る可能性は否定できない。進路意識の未形成を個人の問題に帰することなく、さまざまな社会的サポートを模索する必要があろう。

高校生の進路決定についての分析では、高校の学科のタイプ、性別による違いが大きくあらわれているが、それとともに出身家庭の所得も少なからぬ影響を与えていることがわかった。また、母子家庭出身者は、大学進学者の比率が低く就職者の比率が高いことが明らかになった。これらの結果は、現代高校生の進学と所得との関連は、1980年代初頭のそれに驚くほど似通っていることを示唆している。この20年の間に、何の変化もなかったわけではない。大学進学率の停滞していた1980年代には所得階層間の大学在学率の格差は縮小したが、再び進学率の上昇する90年代以降、格差が再度拡大しつつあるという。高等教育の拡大は、家庭背景の違いによる進学機会の不均等を縮小させるとは限らない。母子家庭出身者の進学機会が限られていることはそのことを物語っているといえよう。

E　健康危険情報

なし

F　研究発表

1. 論文発表

・佐藤香「不安と危機感――高校生の職業意識」『月刊高校教育』2005年9月号、38-43頁

・Keiko Genji, What Do Female High School Students Think of Their Future?: Educational Aspirations, Life Course Expectations and Gender Role Attitudes" *Social Science Japan*, number 32: pp.15-18.

・本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』(NTT出版、2005年)

・石田浩(編)『高校生の進路選択と意識変容』(東京大学社会科学研究所、2006年)

2. 学会発表

・元治恵子「女子高校生の将来像－進路希望とライフデザイン/キャリアデザイン－」第53回関東社会学会大会（2005年6月18日、立教大学）

・深堀聰子「高校生の生活と意識－日米比較より」日本比較教育学会第41回大会自由研究発表Ⅰ（2005年6月25日、日本大学）

・石田浩・元治恵子・佐藤香・鶴田典子・長尾由希子・深堀聰子・朴澤泰男・本田由紀「高校生の進路選択と意識に関する実証研究(1)(2)」日本教育社会学会第57回大会（2005年9月17－18日、放送大学）

G　知的所有権の出願・登録状況

1. 特許取得　　なし
2. 実用新案登録　なし
3. その他　　なし

II.　分担研究報告書

厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業
「若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証的研究」
分担研究報告書

若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証的研究

主任研究者　佐藤博樹　東京大学社会科学研究所

研究要旨

本研究では、少子高齢社会の到来の中で現役世代を担う若年層の進路行動・意識・価値観の実態を研究する。少子化による 18 歳人口の減少、進学率の上昇、卒業後無業者の増加、就職市場の縮小など高校生を取り巻く社会・経済環境は大きく変貌している。このような先行き不透明さを反映してか、高校生の間で実社会へと巣立っていくときに抱く不安感や不本意に感じる「着地不安」の傾向が見られる。着地不安は、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と深く結びついている。良好な友人関係、教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが明らかになった。

働くことや将来の進路・目標といった進路意識の変遷に着目すると、高校３年生の時点に比べ卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。高校を卒業して新しい生活環境にも適応し、将来のことを考える余裕もでき、自分のやりたい仕事を早くしぼらなければならないと感じはじめているが、どんな仕事をしたいか、10 年後にどのようになっていたいかが明確でなく、結果として、自分の進路について悩んでいるという、迷える若者像が浮かび上がってくる。

A　研究目的

本研究の目的は、少子高齢社会の到来の中で現役世代を担う若年層の進路行動・意識・価値観の実態を把握するともに、彼らの行動や意識の変化についてパネル調査を実施して明らかにすることにある。

B　研究方法

高校３年生を対象とした「高校生の生活と進路に関するアンケート調査」（高校生調査）、学校への「高校生の進路指導に関するアンケート調査」（高校調査）、高校卒業後の１年目の追跡調査（第１回追跡調査）、さらに高卒者の保護者を対象とした調査（保護者調査）の４つの調査の分析を行った。

（倫理面への配慮）

マイクロデータを使用の際には、個人が特定されないように十分留意するとともに、個人情報の流出のないように細心の注意を払う。

C　研究結果

今年度は研究会での議論を踏まえて、研究成果を以下の論文にとりまとめた。

「高卒者の追跡調査の設計と特色」（佐藤博樹・石田論文）は、本研究の実施する追跡（パネル）調査の特色を明らかにした。第１に、高校生を在学中に調査した後、卒業後も継続して３年間にわたり追跡するこ

とにより、個人の行動と意識の変化をライフコースの中で総合的に把握することができる。第2に、教育（教育社会学）、就業（労働経済学）、家族（人口・家族社会学）、格差・不平等（社会学）、意識（社会意識と心理）など異なる専門分野からのアプローチを用いて調査を設計・実施し、データを分析していくことができる。第3に、すでに海外で実施されているパネル調査の蓄積を生かし、国際比較が可能な形で調査を設計し、分析しようとすることにある。

「高校3年生の着地不安とその背景」（佐藤香・玄田）は、高校3年生が実社会へと巣立っていくときに抱く心性を「着地不安」と捉え、その背景を分析した。「どんな仕事をしたいのかよくわからない」「自分の進路について今でも悩んでいる」「社会でうまくやっていけるか不安だ」などの項目から着地不安スコアを定義すると、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と着地不安は深く結びついている。着地不安と人間関係との関連をみると、友人から悩み事を打ち明けられるタイプであることや、高校生活との関連では、授業内容が面白いと思っていると着地不安が低くなる傾向がみられた。教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが可能となる。以上の考察を通じ、友人や教師との信頼関係をベースとする充実した学校生活を、すべての高校生に実現する教育や教師の重要性が示唆される。

「進路意識の変化とその規定要因」（元治）は、働くことや将来の進路・目標（進路意識）が高校3年生の時点と卒業後1年目にどのように変化したのか、また変化の背景にはどのような要因があるのかを分析した。高校3年時と卒業1年後を比較すると、卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。男女の間では違いは見られないが、就職している者でその傾向は顕著であり、進学した者でも、大学へ進学した者の方が進路意識は不明確化していた。他方、短大へ進学した者では、意識が明確化している傾向が見られた。重回帰分析によれば、「短大に在学していること」や「家族とのコミュニケーション」は、進路意識の明確にする傾向があるが、「現在志向」は不明確化する傾向があることが明らかになった。

「高卒者と保護者が共有する価値観－親友と好きなことを楽しむ時間・人の役に立つこと」（深堀）は、高校3年生の時点で明らかになった仕事での成功をあまり重視せず、親友と好きなことを楽しむ時間をもつことや、人の役に立つことなどを重視する価値観は、高校卒業後どのように変容したのかを分析する。高卒者が高校3年時の価値観を基本的に維持しており、保護者とも価値観の多くを共有していることを明らかにした。一方、高卒者の価値観には、見過ごせない変化も生じている。就職者の間では、仕事で成功することや人の役に立つことを重視する傾向が弱まっている。進学者の間では、よい教育を受けることを重視する傾向が強まっているが、親友と好きなことを楽しむことを重視する傾向は弱まっている。

「卒業後への連続性－高校生調査の時点から既に進路が変わった人たち」（鶴田）は、高校3年時点と卒業後1年目の間の（希望）

進路の連続性を分析した。おおよそ1割の卒業生の間で、高校生時代の（希望）進路になんらかの変更があり、残りの約9割は進路が一貫していた。卒業前後の（希望）進路の連続性の規定要因を探ると、性別や出身高校といった属性的要因ではなく、本人のパーソナリティといった内面的な要因が影響を与えており、しかもそれは卒業後さらにナイーブな面を強くしていることが明らかになった。進路変更を経験した人々から浮かび上がってきたのは、「自分に自信がなく、かつ自分の考えをうまく伝えることができないナイーブで不器用な人物」像である。

「進路指導の評価に関する規定要因」（長尾）は、高校卒業後に高校時代の進路指導を振り返りどのような評価を卒業生が下しているかを考察した。男女共に7割前後が、高校時代の進路指導に満足していると回答している。満足度に影響を与える要因として、1）自分自身の進路選択に満足している場合は、高校の進路指導に対しても満足感を抱きやすくなること、2）高校が職業や先輩の進路状況についてよく教えてくれる、指導が熱心であるなどの場合は、満足感を抱きやすくなること、3）合格が困難なところは受験させないような雰囲気があった場合は、満足感を抱きにくくなること、などが明らかになった。一方で、現在の進路状況（四大・短大・専門学校・就職など）は、有意な影響を及ぼさなかった。結果としての進路に関係なく、本人の希望を尊重しながらの指導が重要であることが改めて示された

「90年代以降の高校多様化政策と進路選択－就職・進学決定行動と学科との関係」（中澤）は、1990年代以降の高校多様化政策以降、どのような高校を卒業することが就職や進学の機会を高め、また一方で、非正規雇用となるリスクを高める結果になるのかを明らかにした。卒業後1年目の進路（①就職者、②無業者・非正規雇用者、③大学・短大進学者、④専門学校進学者）の分化を規定する教育・学校の効果を検証した。その結果、無業者や非正規雇用者は男性に多く、私学の出身者は就職もしくは専門学校進学をしなければ、無業・非正規雇用になる確率が上昇する。普通科の進学者は、就職の可能性は低くなるが、その代わり、進学か無業者になる確率が上昇する。大学進学率の高い高校ほど、就職や専門学校進学者より無業になる確率が高い。職業科・専門学科の卒業生からは、無業者や非正規雇用者が特に出にくいことも明らかになった。

「中等後教育進学に対する所得の効果」（朴澤）は、高校生の大学・短大・専門学校への進学に対する出身家庭の所得の効果を分析した。高校生調査・第1次追跡調査・保護者調査のデータを男女別に分析した結果、以下の点が明らかになった。第一に、大学（また、短大を含めた高等教育）進学／非進学の二項選択については、男子の場合、出身県や出身学科、高校時代の成績を考慮すると、所得が有意な効果を持たない。専門学校をも含めた中等後教育への進学についてのみ正の効果を持つ。第二に、女子の場合は所得が高いほど、大学または高等教育に進学する見込みが高い。第三に、中等後教育への進学者のみに限り、学校種の選択に対する所得の効果を分析すると、男子の場合、大学／短大・専門学校の二項選

択には有意な効果がないのに対し、女子の場合は正の効果が見られる。また、女子の大学／短大／専門学校間の多項選択については、専門学校に対する大学進学に所得が正の関連を持つことが明らかとなる。

「進学費用の調達方法を決定する要因」（篠崎）は、学費の高低や家計状況が進学費用の調達方法にどのような影響を与えるかを検証した。進学費用の調達方法には、1）貯蓄(自己資金）のみ、2）借入のみ、3）貯蓄と借入の組み合わせの3種類が考えられるが、どの調達方法を選択するかは家計の経済状況に大きく左右される。計量分析の結果からは、1）家計収入が高いほど貯蓄のみを選択する確率が高いこと、同時に、家計収入が低い世帯は借入のみをより選択しやすいこと、2）進学者が1人暮らしである場合、学費が高い場合は、貯蓄と借入の組み合わせを選択する確率が高く、資金制約下にある家計が調達方法の多様化を図っていることが明らかになった。

「1人親家族と大学進学－2004年高校生調査の母子家族を中心に」（平沢）は、1人親家族のなかでも母子（つまり父親がいない）家族の進学行動を分析した。母子家庭出身者は、そうでない者にくらべて男女とも、①大学進学（予定）者の比率が低く就職（予定者）の比率が高いこと、②その傾向は経済的な理由による直接的な関連と、学校類型（普通科進学校、普通科一般校、職業・総合校）を媒介とした間接的な関連に分けられること、ただし③その様態はやや複雑で、性別によって、また注目する2変数によって関連の有無に異なる傾向がみられること、が示された。教育機会の不平等を考察する際に、今後は1人親家族をも視野に入れたより包括的な分析が望まれる。

D　考察

論文の考察を簡潔にまとめると次のようになる。

・　高校3年生が実社会へと巣立っていくときに抱く不安感や不本意に感じる心性を「着地不安」と捉え、その背景を分析した。着地不安は、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と深く結びついている。良好な友人関係、教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが明らかになった

・　働くことや将来の進路・目標（進路意識）が高校3年生の時点と卒業後1年目にどのように変化したのかを分析すると、卒業後の方がむしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。男女の間では違いは見られないが、就職している者でその傾向は顕著であり、進学した者でも、大学へ進学した者の方が進路意識は不明確化していた。他方、短大へ進学した者では、意識が明確化している傾向が見られた。「家族とのコミュニケーション」は、進路意識を明確にする傾向があるが、「現在志向」は不明確化する傾向があることが明らかになった。

・　高卒後の進路選択の規定要因を分析すると、無業者や非正規雇用者は男性に多く、私学の出身者は就職もしくは専門学校進学をしなければ、無業・非正規雇用になる確率が上昇する。普通科の進学者は、就職の可能性は低くなるが、その代わり、進学か無業者になる確率が上昇する。大学進学率の高い高校ほど、就職や専門学校進学者よ

り無業になる確率が高い。なお、職業科・専門学科の卒業生からは、無業者や非正規雇用者が特に出にくいことも明らかになった。出身家庭の所得の効果についてみると、男子の場合、出身県や出身学科、高校時代の成績を考慮すると、大学進学か否かに有意な効果を持たない。女子の場合は所得が高いほど、大学または高等教育に進学する見込みが高い。また、母子家庭出身者は、大学進学者の比率が低く就職者の比率が高いことが明らかになった。

E　結論

少子化による18歳人口の減少、進学率の上昇、卒業後無業者の増加、就職市場の縮小など高校生を取り巻く社会・経済環境は大きく変貌している。このような先行き不透明さを反映してか、高校生の間で実社会へと巣立っていくときに抱く不安感や不本意に感じる「着地不安」の傾向が見られる。働くことや将来の進路・目標といった進路意識の卒業後の変化をみると、むしろ卒業後の方が進路意識が不明確化する傾向が見られた。自分の進路について悩んでいるという、迷える若者像が浮かび上がってくる。

F　健康危険情報

なし

G　研究発表

1．論文発表

・佐藤香「不安と危機感――高校生の職業意識」『月刊高校教育』2005年9月号、38-43頁

・Keiko Genji, "What Do Female High School Students Think of Their Future?: Educational Aspirations, Life Course Expectations and Gender Role Attitudes" *Social Science Japan*, number 32: pp.15-18.

・本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』(NTT出版、2005年)

・石田浩(編)『高校生の進路選択と意識変容』(東京大学社会科学研究所、2006年)

2．学会発表

・元治恵子「女子高校生の将来像－進路希望とライフデザイン/キャリアデザイン－」第53回関東社会学会大会（2005年6月18日、立教大学）

・深堀聰子「高校生の生活と意識－日米比較より」日本比較教育学会第41回大会自由研究発表Ⅰ（2005年6月25日、日本大学）

・石田浩・元治恵子・佐藤香・鶴田典子・長尾由希子・深堀聰子・朴澤泰男・本田由紀「高校生の進路選択と意識に関する実証研究(1)(2)」日本教育社会学会第57回大会（2005年9月17－18日、放送大学）

H　知的所有権の出願・登録状況

1．特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし

厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業
「若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証的研究」
分担研究報告書

「高卒者の追跡調査の設計とその特色」

主任研究者　佐藤博樹　東京大学社会科学研究所
分担研究者　石田　浩　東京大学社会科学研究所

研究要旨

本研究の実施する追跡（パネル）調査の特色を３点にわたって明らかにした。第１に、高校生を在学中に調査した後、卒業後も継続して３年間にわたり追跡することにより、個人の行動と意識の変化をライフコースの中で総合的に把握することができる。第２に、教育（教育社会学）、就業（労働経済学）、家族（人口・家族社会学）、格差・不平等（社会学）、意識（社会意識と心理）など異なる専門分野からのアプローチを用いて調査を設計・実施し、データを分析していくことができる。第３に、すでに海外で実施されているパネル調査の蓄積を生かし、国際比較が可能な形で調査を設計し、分析しようとすることにある。このような作業を積み重ねることで、より厳密な国際比較が可能となり、日本の高校生の特質をより鮮明に明らかにすることができる。

A　研究目的

本研究の目的は、高校を卒業した若年層を対象にした追跡調査の設計とその特色を考察することにある。

B　研究方法

独自に実施した高卒者の追跡調査の調査設計、調査実施、調査結果を分析した。

（倫理面への配慮）

マイクロデータを使用の際には、個人が特定されないように十分留意するとともに、個人情報の流出のないように細心の注意を払う。

C　研究結果

本研究が実施した高卒者を対象とした追跡調査は、今までの研究とは異なる特色があることが明らかになった。第１に、高校生を在学中に調査した後、卒業後も継続して追跡することにより、個人の行動と意識の変化をライフコースの中で総合的に把握することができる。従来の調査・研究では、高校生を対象にした場合には在学中の進路・意識に限定されるか、卒業後直後の「学校から職場への移行期」に焦点が当たることが多かった。これに対して本研究では、高校卒業後３年間という長期にわたり追跡調査することにより、高卒後のより長い時間的なライフサイクルの中で、若年期の意識・価値観の変遷や初期キャリアの発展について考察することが可能となる。

第２に、教育（教育社会学）、就業（労働

経済学)、家族（人口・家族社会学)、格差・不平等（社会学)、意識（社会意識と心理）など異なる専門分野からのアプローチを用いて調査を設計・実施し、データを分析している。これにより、若年者の行動と意識をより多角的、総合的に捉えることができる。

第３に、すでに海外で実施されているパネル調査の蓄積を生かし、国際比較が可能な形で調査を設計し、分析しようとする。高校生を対象とした国際比較研究は、まだ数が極めて限られている。本研究では、調査設計の段階から米国の高校生調査を参考にしながら、類似の調査項目を意識的に挿入してきた。質問の仕方も米国調査と類似した形で尋ね、選択肢の内容や数もできるだけ比較可能なように調査票を設計した。このような作業を積み重ねることで、より厳密な国際比較が可能となり、日本の高校生の特質をより鮮明に明らかにすることができる。

D　考察

高校在学中の生徒を調査した後、卒業後も継続して追跡しパネル調査を実施することの難しさとその意義について考察した。

E　結論

高校卒業者を継続して追跡するパネル調査を、多様な分野の研究者が協力し、海外のパネル調査の蓄積を参考にしながら、設計し実施した意義は大きい。

F　健康危険情報

なし

G　研究発表

１．論文発表

石田浩(編)『高校生の進路選択と意識変容』(東京大学社会科学研究所、2006 年)

２．学会発表

石田浩・元治恵子・佐藤香・鶴田典子・長尾由希子・深堀聰子・朴澤泰男・本田由紀「高校生の進路選択と意識に関する実証研究(1)(2)」日本教育社会学会第 57 回大会（2005 年 9 月 17－18 日、放送大学)

H　知的所有権の出願・登録状況

１．特許取得

なし

２．実用新案登録

なし

３．その他

なし

厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業
「若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証的研究」
分担研究報告書

「高校３年生の着地不安とその背景」

分担研究者　佐藤　香　東京大学社会科学研究所
分担研究者　玄田有史　東京大学社会科学研究所

研究要旨

高校３年生が実社会へと巣立っていくときに抱く心性を「着地不安」と捉え、その背景を分析した。「どんな仕事をしたいのかよくわからない」「自分の進路について今でも悩んでいる」「社会でうまくやっていけるか不安だ」などの項目から着地不安スコアを定義すると、現代の若者に特徴的といわれている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」と着地不安は深く結びついている。着地不安と人間関係との関連をみると、友人から悩み事を打ち明けられるタイプであることや、高校生活との関連では、授業内容が面白いと思っていると着地不安が低くなる傾向がみられた。教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが可能となる。以上の考察を通じ、友人や教師との信頼関係をベースとする充実した学校生活を、すべての高校生に実現する教育や教師の重要性が示唆される。

A　研究目的

本研究の目的は、高校生が実社会への本格的な着地を不本意に感じる「着地不安」の背景を考察することにある。

B　研究方法

独自に実施した「高校生の生活と進路に関するアンケート調査」（高校生調査）を分析した。

（倫理面への配慮）

マイクロデータを使用の際には、個人が特定されないように十分留意するとともに、個人情報の流出のないように細心の注意を払う。

C　研究結果

本論文では、他者に囲まれた実社会への本格的な着地を不本意に感じる心性を「着地不安」ととらえ、高校３年生の抱える着陸不安とその背景を検討した。「どんな仕事をしたいのかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」「自分の進路について今でも悩んでいる」「社会でうまくやっていけるか不安だ」といった項目から着地不安スコアを定義したところ、現代若者の特徴とされる「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」のいずれとも密接な関係があることが確認された。

着地不安は、個人の性格や心理によって起因されると同時に、本人を取り巻く社会

環境とも強い関連性がみられる。人間関係との関連をみると、友人から悩み事を打ち明けられるタイプである場合や、高校生活との関連では、授業内容が面白いと思っている場合、着地不安が低くなる傾向が観察された。

さらに親や教師などの大人からの期待は、間接的に着地不安に影響を与える可能性がある。特に教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、授業を面白いと感じさせることで、着地不安を間接的に軽減させることが可能となる。

以上の考察を通じ、友人や教師との信頼関係をベースとする充実した学校生活を、すべての高校生に実現する教育や教師の重要性が示唆される。

D 考察

現代の社会においては、青少年は豊かさのなかで育てられ、現在が楽しいというのは当然の前提となっている。その現在からみれば、将来は不透明であるだけでなく、働かなくてはならないというだけでもネガティブにみえるのではないだろうか。こうした状況下では、着地不安を抱くことは、多くの高校生にとってむしろ当たり前の現実である。友だちと悩みを打ち明けあい、授業内容を面白いと思えるような高校生活を送ることができるようにすることが、着地不安の軽減には重要である。

E 結論

本稿での考察をさらに進めれば、充実した高校生活を送ったと思うことができれば安心して次のステップに進むことができるという可能性が示唆される。友人や教師との信頼関係をベースに充実した学校生活を、すべての高校生に構築することが、何よりまず優先されるべきなのではないだろうか。そのための具体的な支援策について、今後引き続き検討していくべきであろう。

F 健康危険情報

なし

G 研究発表

1．論文発表

佐藤香「不安と危機感――高校生の職業意識」『月刊高校教育』2005 年 9 月号、38-43 頁

石田浩(編)『高校生の進路選択と意識変容』(東京大学社会科学研究所、2006 年)

2．学会発表

石田浩・元治恵子・佐藤香・鶴田典子・長尾由希子・深堀聰子・朴澤泰男・本田由紀「高校生の進路選択と意識に関する実証研究(1)(2)」日本教育社会学会第 57 回大会 (2005 年 9 月 17－18 日、放送大学)

H 知的所有権の出願・登録状況

1．特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし